

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

最近の若者は、自分が周りから浮いてしまうことを非常に恐れていて、常に自分が浮いた存在にならないように、なるべく周囲と合わせるように努力しているのだと聞いたことがあります。皆さんはどうでしょうか。

誰でも仲間はすれにはなりたくないでしょう。だからどうしても周囲に同調してしまう。服装もなるべくみんなと同じようにする。自分の意見があってもなるべく外には出さず、みんなの意見に従うようにする。そういうふうにして嫌われないようにしている人もきっと多いのではないのでしょうか。もっともこれは最近の若者に限ったことではありません。周囲から浮いてしまうことを昔から人間は極度に恐れていたようです。

「というようにことわざもこうした事情を背景にしているのでしょう。」

けれどもここで立ち止まってよく考えてみましょう。この場合の仲間はすれというのは、多数の人たちの作るグループからはずれてたつた一人になつてしまうことです。そしてこういう場合、仲間というのは、似ているということがその特徴だと思われています。イヌの仲間、ネコの仲間というような使い方をされるときは、確かに仲間は「似たものどうし」という意味です。しかし、私たちが作っていく仲間は、それと同じではないのでしょうか。

現代は民主主義の世の中です。世界にはそうではない国もありますが、多くの国が民主主義の政治を行っています。民主主義というのは、ものごとを王様のような絶対的な権威を持つ者にまかせずに、自分たちで決めるということです。ただし、何を決めるにしてもみんな決めていくことになる、意見がいろいろあつてなかなか決まりません。絶対的な王様がいればそのひとことで決まるのですが、民主主義ではそうはいきません。そこでものごとを決めるときには、多数決という方法がとられるのです。学校でもクラスで何かを決めなければいけないときには、だいたい多数決で決めてきたことでしょう。それはそれ以上に良い方法がないからです。こうして民主主義の世界では、多数決がととても大事にされてきました。けれどもその結果、大きな誤解が広がってしまったのです。

多いか少ないかは、良いか悪いかはまったく関係のないことです。テーブルの上にリングがたくさん載つていたとしても、リングが多いことは、良いことでも悪いことでもなく、ただ多いというだけのことです。リングの好きな子どもにとっては多いことは良いことでしょうが、嫌いな子どもにとってはむしろ悪いことでしょう。多いか少ないかは、良い、悪いに関係のないのに、多数決でものごとを決めているうちに、いつの間にか多数は良い、少数は悪いという図式が私たちの頭の中に住み着いてしまったようです。

ところで、人間は社会的な動物だといわれます。つまり人間はグループを作つて生きていく動物だということです。そのグループがどのように作られるかというと、似たものどうしが集まつてできる傾向が強いようです。皆さんも、どのように「仲良しグループ」ができたかを考えてみれば、このことにはきつと思ひ当たることがあるはずです。趣味が同じ、出身地が同じ、仕事が同じ、考え方が似ているなどの理由で人は結びついていき

ます。こうした共通点によつてグループができていきます。共通点で結ばれたグループが大きくなると、そのグループに属する人が多数だということとは本来良いことでも悪いことでもないのに、いつの間にか良いことだと思われ、その結果として、共通点そのものまでもが良いこととされてしまふのです。こうしてできた多数派のグループに入ろうとすると、そのグループの人たちと似ていることが求められます。ですから「似ていない」「異質である」と、絶対にそのグループには入れてもらえない。^③「仲良しグループ」は閉鎖的なものです。

仲間はすれになることを恐れ、みんなと同じような服を着て、同じような考え方をし、同じテレビを見る。そうすることでグループの一員として受け入れられれば確かに居心地はよいでしょう。しかし、^④そうして暮らしているうちに、人は次第に大きな不満を抱えることになるはず。周りから浮いてしまうことを恐れるのは、自分が周囲とは異質な存在として少数派になることを恐れているからでしょう。けれども本来人間はひとりひとり違うものなのです。むしろ違うからこそ人間なのです。

共通点を基礎としたグループは、えてして自分たちが多数派だから良いと考えたり、自分たちと異なつた人々を悪いと決めつけて排除したりするようになるものです。そして、このようなことが、世界中で起きているさまざまな争いの原因となつていることも少なくないのです。

今私たちに必要なのは、「多いこと」「同じこと」は決して良いと決まっているわけではないということをはつきりと理解することです。すべてが多数決で決まるわけではありません。ほとんどの人が「天動説」を信じていたときに、「地動説」を主張したガリレオは少数派でした。しかし結局正しかったのはガリレオだったということは今では誰でも知っています。また、せっかく外国に出かけたのに、一緒に行った日本人と話をしているばかりでは見聞は広がりません。むしろ自分たちとはまったく違った外国の人と話してみることが大切なのです。

自然にできる「似たものどうしの集まり」としての仲間が悪いというわけではありません。それはそれで気楽な集まりとして大事にしていけばよいでしょう。けれども、交通機関や情報機器の発達した現代では、昔とは比較にならないほどさまざまな人々との出会いがあります。しかもそうして出会ったさまざまな人々が、お互いに理解しあわなければ生きていけない社会となつていっています。こうした現代の社会に生きる私たちは、積極的に、意識的に、「仲間」を作つていかなければなりません。そのとき大切なのは、お互いに似ていないからこそ「仲間」を作るのだという意識と、少数派を尊重するという意識でしょう。人間はお互いに違っているからこそ人間なのだというのをいつも忘れないでいたいものです。

問一 に入れることわざとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 朱に交われれば赤くなる。 イ 雨降って地固まる。 ウ 郷に入つては郷に従え。 エ 出る杭は打たれる。
オ 花より団子。

問二 ①「大きな誤解」とは、どのような誤解ですか。四十字以内で答えなさい。（字数には句読点もふくみます。）

問三 ②「このこと」とは、どういうことですか。

問四 ③「仲良しグループ」は閉鎖的なものです。」とありますが、この文と同じ内容を表している文を探し、その最初の五文字を抜き出して答えなさい。

問五 ④「そうして暮らしているうちに、人は次第に大きな不満を抱えることになるはずです。」とありますが、それはなぜですか。

問六 筆者は、現代の社会においてどのような「仲間」を作っていかなければならないと言っていますか。二十字以内で答えなさい。（字数には句読点もふくみます。）

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

朝、大きなカバンを持って家を出たジェイソンは、学校には行かずに、リバプール行きの急行列車に乗りこんだ。

きのうの夜、父さんと母さんが、またけんかした。でもぼくは、もう、いなくなるんだ。あとは、二人で好きなだけ、大声でけんかすればいい。マイケル兄さんは、十八才になった次の日、家を出て行って、働き始めた。兄さんは、いつも宿題を手伝ってくれた。父さんと母さんがけんかを始めると、きまって大きな音で音楽をかけてくれた。今も、相変わらず宿題や、けんかはある。でも今は、自分ひとりで何とかしなくちゃならない。リバプールに行くことにしたのは、兄さんに会うためだけじゃない。家を出てしまいたかったんだ。あんなめっちゃくちゃな家、もう、いやだ。

ジェイソンは、通路を歩いてトイレに向かった。よかった。知っている顔は一つもない。トイレに入ろうとドアをあけたとたん、ジェイソンは、十一才の自分と同じくらいの年かつこうの子とばったり出会った。次の瞬間、ジェイソンはその子にトイレの中に引きずりこまれた。

「おれ、きつぷ持っていないんだよね。ただ乗り。車掌に見つかると思すいんだ。おろされちゃうだろう？」そのことばが、ジェイソンの耳に一気に飛びこんできて、頭の中がいっぱいになった。うなずくのがせいっぱいだった。

その子は、ドアを少しあけて外をうかがっていたが、「来た来た！」と小声で言ううと、ドアをびたつとした。数秒後、その子は「やれやれ。」といった様子で大げさなため息をついた。そしてドアから首を出してあたりをうかがうと、「よし。じゃましたな。じゃあね。」と言って、車掌が行ったのとは反対の方向に、急いで逃げていった。ジェイソンはただただあつけにとられるばかりだった。

ジェイソンが席にもどった時、列車はシェフィールド駅に停車するところだった。もう一駅、マンチェスターにとまれば、その次がリバプール。マイケル兄さんに会える……。こんなことしちやつたけど、兄さんおこりませんように。ジェイソンは、そんな不安を心の奥にしまいこんだ。

家から離れば離れるほど、見つかる可能性は少なくなっていく。それで、少し落ち着いてきたけど、もうもどれないと思うと、つらかった。こうして列車にゆられていた間、自分のしていることや、これからのことについて、いくらでも考える時間があるのも、つらかった。

② ジェイソンは、父さんと母さんには、いつもはぐらかされてきたと思っていた。小さいころは、幸せだと思ひこまされていた気がする。でも本当に幸せだったのかな？ おとといの夜、ジェイソンは、父さんたちの寝室にしのびこんで、引き出しから古いアルバムをこっそり持ち出した。写真の中の、家族の笑顔をよく見てみたけど、本当に幸せで笑っているのかどうか、分からなかった。ジェイソンは、小さいころの、プールでマイケル兄さんとうつつている写真を大事にしていた。この写真だけは自信があるんだ。ぼくはこの時、本当に幸せで笑ってたんだ。

駅を出て十五分くらいたった時、あの少年が、また姿を現した。ジェイソンのとなりにどすんとすわりこんだ。

「さつきはどうも。おれは、家出屋のジャム。よろしくね。」ジェイソンは自分も名前を告げてから、言った。「家出屋っていったい何なの？」

「家出屋？ たくさんいるよ。列車に住んで、イギリス中を移動してるんだ。旅する家出屋って感じかな。おれたちは家出屋って言うけどね。」いったいどこまでが本当なんだろうと、ジェイソンは思った。それから、ジャムは家出屋になつてからのことを話してくれた。さつきやりすごしたバーキーという車掌と初めて会った時のことも。ジャムを初めてつかまえた車掌がバーキーで、網棚によじ登ろうとしているところを見つけた。それ以来、どんなふうにしてバーキーの裏をかいてきたかも、ジャムは話してくれた。ジェイソンは、口をあぐりとあけて聞いていた。

ジャムは、あきらめたように、肩をすくめて言った。

「おれ、自分のおふくろもおやじも、知らないんだよね。たぶん、すてられたんだ。それから、うんと小さい時に、だれかに預けられたか。おぼえてないんだ。ずうつと施設に住んでたからさ、家出屋になるまではね。おれは、おふくろやおやじなんて、いらないんだ。本当はさ、みんな、親なんていらなんだよ。この前に引き取られていったやつなんて、新しい両親が、いつもけんかしてさ。どなり合ってるんだって。それで、そいつ、新しい親を見すてて、また施設にもどつて来たよ。」ジャムは、自分の胸をたたいてみせた。「だからおれは、里親にもらわれたことなんかいい。おれのことなんて、引き取りたくないって思うように、しむけてきたんだ。親どうしのけんかになんて、付き合っていられないよ。」

ジェイソンは、うなずいた。その通りだ。ジャムは続けた。

「人間 本当に必要なのは、自分だけだよ。おれは、そう思うね。他人は、うらぎるから。おれを見てみるよ。もう二年もうまくやってるんだぜ。だれにもだまされずに、ちゃんとさ。」ジャムは、一人でうなずいた。「おれは、家出屋だからね。一人でやっていける。自分のことは自分でする。」ジェイソンは、何も言えなかった。たぶん、ジャムの言う通りなんだ。ひとにたよらずに、自分のことは自分でしなくちゃいけないんだ。ジェイソンは、ジャムのように、列車から列車へ移り住む生活を想像してみた。うるさく言う人もいないれば、うらぎる人もいない生活を……。

旅は終わりにさしかかっていた。もうすぐマイケル兄さんに会える。でも、本^④当に会いに行つていいものか、ジェイソンは迷い始めていた。

「やつと見つけたわ！ こんな所にいたの！」女の人の声に、二人は飛び上がった。「お父さんと、あつちこつち、ずつとさがしてたのよ。」

ふりかえると、丸顔の女の人が、恐ろしい顔をして二人の席に、身を乗り出して、ジャムをにらみつけて、「まったく、もう。」とか、ぶつぶつ言っている。ジャムに目をやると、しゅんとうなだれていた。そして自分のひざを見つめたまま、口を開いた。

「ぼくたち、何も悪いことしてないよ。遊んでいただけなんだ。ほんとだよ。」女の人は、いらいらしたように、まつげをばさばさふるわせた。

「さあいらつしやい、ジェームズ。ほら、早くしてちょうだい。」そう言うと、せわしく手招きして、席から立たせた。ジェイソンは、何と声をかけたらいいのか、さっぱり分からなかった。女^⑤の人のとなりに立つたジャムは、急に小さく見えた。ジャムは、静かに、うつむいたまま言った。

「いっしょに遊んでくれて、どうもありがとう。家出屋^⑥ごっこ、楽しかった？ おもしろかったよね。」ジェイソンは、ゆつくりうなずいた。

「よかった。ぼくも楽しかった。」とジャムは言った。それから、お母さんに引っぱられて、行つてしまった。

ジェイソンは、リバプール駅に着くと、最初にホームにおりた。ジャムをさがそうとしたけれど、おりてくる人たちにおし流されてしまった。人波にもまれながら出口へ向かった。その時だった。マイケル兄さんが、手をふっているのが見えた。兄さんは、大声でジェイソンの名前を呼ぶと走ってきた。ジェイソンも、かけよった。兄さんは、前のままで、変わつていなかった。よかった。本当は、ちよつと心配してたんだ……。

「父さんと母さんが、おまえはたぶん、こつちに来るだろうって電話してきたんだ。」マイケル兄さんのことばで、ジェイソンは、はつとした。

「おまえが、学校に現れなかったんで、学校から母さんの仕事場に電話があつたんだって。父さんが、おれのところに連絡^⑦してきたよ。いいか、おまえは、父さんと母さんにすごく心配をかけたんだからな。でもこれで、父さんたちにも分かつたと思うよ。たいへんな思いをしているのは、自分たちだけじゃないって。二人とも、明日こつちに来るっていうからさ。そしたらみんな、いろんなことを、ゆつくり話し合おうな。」

ジェイソンは、足もとを見つめていた。リバプールの冷たい風で、少しぶるつとした。マイケル兄さんが聞いた。

「父さん、相変わらず趣味の悪い音楽かけてるんだろ？」ジェイソンはうなずいた。なみだがあふれそうになつたけど、どうにか笑つて見せた。

「父さんも母さんも、そんなにひどい人間じゃないよ。」マイケル兄さんは、やさしく言った。「二人のけんかだつて、そんなに深刻なものじゃないし。おまえにも、分かるだろう？」ジェイソンは、うなずいた。兄さんの言うことが、分かつてきた気がした。

兄さんは、ジェイソンの肩に、うでを回した。「さて、行くか。おれのアパートで、まともな音楽でも聞こうぜ。」

ジェイソンは、歩き出す前に、もう一度だけ、にぎやかな駅を見渡した。ジャムを見つけたかった。見つけ出して、言いたかった。どんな人でも、時々逃げ出したくなるんだよって。^⑧

『家出の日』(キース・グレイ作・まえざわあきえ訳)による。

問一 ——— ①「あつけにとられる」、——— ③「裏をかいできた」とありますが、(1)「あつけにとられる」(2)「裏をかく」の意味として、もつとも適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

(1)「あつけにとられる」

ア 不安な気持ちにさせられる。 イ あきれてボカンとする。 ウ いても立つてもいられなくなる。
エ いたたまれない気持ちになる。

(2)「裏をかく」

ア 相手をばかにする。 イ 相手を油断させる。 ウ 相手の予想をだしぬく。 エ 相手の弱点をせめる。

問二 ——— ②「ジェイソンは、父さんと母さんには、いつもはぐらかされてきたと思つている。」とありますが、ジェイソンがこのように思うようになったきっかけは何ですか。

問三 ——— ④「本当に会いに行つていいものか、ジェイソンは迷い始めていた。」とありますが、なぜ迷い始めたのですか。

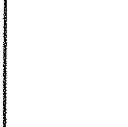
問四 ——— ⑤「女の人のとなりに立つたジャムは、急に小さく見えた。」とありますが、ジャムがこのように見えたのはなぜですか。

問五 ——— ⑥「どんな人でも、時々逃げ出したくなるんだよって。」とありますが、ジェイソンはジャムに対してどういう気持ちを伝えたかったのですか。

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|---|--------------|----|--------------|----|-------------|
| 1 | 大臣をケイゴする。 | 6 | 舟のコウゾウを研究する。 | 11 | 毛布をホす。 |
| 2 | 国会のショウニンを得る。 | 7 | 輸入品にカゼイする。 | 12 | カガミに顔を映す。 |
| 3 | 土地をソクリヨウする。 | 8 | 路線バスのケイトウ。 | 13 | 卒業証書をサズける。 |
| 4 | 畑にヒリヨウをまく。 | 9 | 会場でシャザイをする。 | 14 | 皿に果物をモる。 |
| 5 | キントウに分配する。 | 10 | カンマツの地図を見る。 | 15 | 友人のもとをタズねる。 |

氏名



[illegible]

--	--	--	--	--

[illegible]

(1)
(2)

--

1

11	6	1
す		
12	7	2
13	8	3
ける		
14	9	4
る		
15	10	5
ねる		